

今月のお話は、坐井观天(井戸の中から天を見る)、日本語では、「井の中の蛙、大海を知らず」として、よく使われる諺です。



古井戸に一匹の蛙が住み着いて、毎日井戸の底から、井戸の縁に囲われた丸い小さな青空を見上げて暮らしていました。

ある日、一羽の小鳥が飛んで来たので、蛙は小鳥に訊ねました。「あんたはどこから来たんだい？」小鳥が応えました。「僕は空を飛んでやって来たのさ。何百キロも飛んで来て、喉が渇いたので、飲み水を捜して降りて来たんですよ」蛙は言いました。「空は、あの井戸の縁の大きさしかないのに、あんたはそんな遠くから飛んでこられるわけがないだろう！」小鳥が言いました。「あんたは間違っているよ。空はとっても大きくて、限りが無いんだよ！」

蛙は笑いながら言いました。「私が間違っているなんてことはないよ。私は、毎日ここに座って空を眺めているんだ。目を上げればすぐに空が見えるんだぞ。間違えるはずがないじゃないか！」小鳥もまた、笑いながら言いました。「あんたはそんなとこに座ってないで、井戸の外に出てご覧よ。そして見渡せば、空がどんなに大きいか、すぐわかるから！」

言葉の説明：观=看。井戸の底に座って空を見る。視野が狭い、見識が低いことの喩え。

使用例：問題全体をよく見て、深く理解しなければならぬ。井の中の蛙であってはいけない。



これは、日本でも良く親しまれている諺ですから、中国でも古い話なのかと思いましたが、何と、唐代の詩人韓愈の話から出た言葉なのだそうです。韓愈も十分古いのですが、史記の成立年代からざっと700年は経っていますから、随分新しい出現のように感じます。中国の歴史を考える時、陥りやすい錯覚ですね。

蛙は日本人に親しみ易く、鳥獣戯画などにも頻りに登場します。この話で思い出したのは、小さい時に聴いた昔話です。京都の蛙が、大阪は賑やかだと言う話を聞いて、一度見てみたいと大阪に向かいました。その頃、大阪の蛙も、京都が日本の都で、とても立派だと聞いたので、見学に行って見ようと思い、京都に向けて旅立ちました。

二匹の蛙は、苦勞しながら旅を続け、京都と大阪の境の峠でばったり出会いました。お互いの旅の目的を知ると、ここで背伸びをして眺めれば、街まで行かなくても様子が分かるだろうと相談して、お互いの身体を支え合

いながら、精一杯背伸びをして前方を見やりました。

京都の蛙が見たものは、お寺の塔がたくさんあり、広い通りが続く立派な街並みでした。大阪の蛙が見たものは、人や荷馬車が行き交う、活気に溢れた街の様子でした。二匹の蛙は、お互いに、「大阪は京都と同じようにお寺がたくさんある立派な街だ」、「京都も大阪と同じように活気がある大きな街だ」と思いました。二匹の蛙は、同じような街なら、態々苦勞して旅を続けて、見に行く

必要はないと考えて、それぞれもと来た方向へ帰って行きました。

実際は、蛙が立ち上がると、目が後ろになるので、それぞれの蛙が見たものは、やって来た方向の、自分たちの街だったのです。日本の昔話としてこのお話を聴いたのは随分幼い時で、蛙が自分たちの眼の位置にも気が付かず、京都も大阪も同じだと考えたことが面白くて、記憶に残りました。

でも今考えれば、井の中の蛙が一念発起して、外の世界を見てやろうと旅には出たけれど、最後の最後は、やはり自分の殻を破って外の世界へ飛び出すことが出来なかったと言う寓意のこもった話だったのではないかなという気がしてきます。因みに、このお話の舞台は、西国街道山崎の天王山と言うことになっています。

